

言語と文化と結界

言語文化論的視点からの考察

石井隆之*

Language, Culture and Religious Barriers

Takayuki ISHII

Abstract

The notion of religious barriers plays a significant role in dividing many physical areas into sacred and secular spaces. This paper explores a possibility of establishing a new notion of time-related religious barriers formed by language in contrast to the ordinary space-related barriers, by focusing on a popular Japanese expression “Itadakimasu,” which is uttered by most Japanese before they eat. Moreover, I will seek for the logical descriptions of the impacts of words uttered by speakers on individuals’ psychological barriers, which I regard as a form of religious barriers in this paper. Furthermore, the paper also aims at giving principled explanation to grammatical mechanisms found in the Japanese language under the religious barrier-based framework.

Keywords : ① religious barriers ② chopsticks ③ *Itadakimasu* ④ parts of speech
⑤ subjectivity and objectivity

0. はじめに

田辺イエロウ氏の漫画作品に、結界術（＝空間支配術）を駆使して妖怪を退治する物語である『結界師』がある。サブカルチャーの領域で、「結界」という言葉がキーワードとなっている。

そもそも「結界」とは仏教用語で、簡単に言えば、聖なる世界と俗なる世界を分けることを指す。

例えば、仏教では、須弥壇の四隅に四天王（四方を守る守護神）を置くことにより、聖なる世界と俗なる世界を分けている。例えば、須弥壇が聖なる世界で、その外側が俗なる世界である。

密教の神秘主義が発達するにつれ、「特殊なエネルギーを保持した神秘空間としての界」という概念が生じ、結界が強調されるようになった

と考えられている。^{注1}

神道においても、仏教の結界に相当する概念である「端境」（＝はざかい）が存在する。

神道の結界を最も象徴する事物は、鳥居と注連縄である。鳥居は俗なる世界と聖なる世界を分ける。もちろん、神社の神域側が聖なる世界である。注連縄も鳥居と同じ機能を持ち、その注連縄を張られた側が聖なる世界となる。^{注2}

本稿では、上記のような宗教的結界をもう少し幅広く捉え、一見結界とは関連性が薄いと考えられる「言葉」の世界が結界とどのように関わっているのかについて考察し、結界という文化的事象と言葉の関係を明らかにすることが目的である。

受付：平成 28 年 11 月 21 日 受理：平成 29 年 10 月 11 日

* 近畿大学総合社会学部 教養基礎教養部門・教授（理論言語学・言語文化論）

1. 「箸」の文化と結界

1-1 箸は橋

日本人が主食とする米は、アマテラスが農業により作ることを奨励したとされるので、神道的には神聖な食品である。^{注3}

その神聖な米とともに出てくる日本の食は全体として神聖性を帯びているので、食前には、我々の口という俗的な世界と一線を画する必要がある。

食の聖と口の俗を分ける結界を作るアイテム（＝本稿では「結界アイテム」を呼ぶ）が箸に他ならない。部屋の四隅に置く盛り塩や須弥壇の四隅に配す四天王のような役割を箸が担っていることになる。

結界を明確に示す役割を果たす箸は、聖なる食べ物と俗なる口を結ぶ架け橋となっている。その意味で＜箸は橋である＞と言える。

1-2 箸は端

箸は昔、竹や木を折り曲げて両端を合わせた、いわばピンセットのような形をしていた。これで食べ物を挟んで食していた。だから＜箸は端である＞とも言える。箸の端で食べ物を扱うからである。

実際に、現在の箸でも「箸の端」が、食べ物を挟んだり、解したりして、食べ物を口に運んだりする重要な役割をしている。

箸は、日本の食に頻出する豆腐や魚といった食品を簡単に口に運べる優れものである。箸の持つ挟むこと、解すこと、骨を取り除くことなどは、ナイフとフォークではできない技であろう。

1-3 箸は柱

箸を立てるとまさに柱で、＜箸は柱である＞と言える。柱は神の数え方だから、箸は神に通じるのである。^{注4}

枕飯の箸の風習を見れば、一目瞭然で、まさに箸に神が宿るのである。

箸が神聖な食べ物を俗なる口に運べるのは、まさに、箸が結界アイテムだからこそ可能であると言える。もちろん、箸が神に通じること

も、結界アイテムである所以である。

日本は世界で唯一の箸中心文化である。韓国も箸を使うが、基本的には取り箸が多く、飯はスプーンで食べるのが普通である。中国も散蓮華も併用するので、箸中心とはなかなか言えない。

1-4 箸の置き方と日本料理の特徴

箸中心文化は「箸を結界アイテム化する」と言える。箸は食べ物と自分を分けるように横に置く。まさに結界の形である。一方、ナイフとフォークは、皿の両側、すなわち縦に置く。だから食と人の間に結界を作れない。^{注5}

これは、日本料理が完成品であることと関係がある。西洋料理の肉料理は、ナイフで切って、フォークで刺して食べる形が要求される未完成品。一方、完成品としての食は当然「神聖なもの」と言える。

箸中心文化圏で、完成品である日本料理を、結界アイテムである箸で食べるということ、そして、箸は聖なる食と俗なる口の架け橋になっているということは、箸に霊力が宿ると言われることにつながる。

2. 「いただきます」の考察

2-1 「いただきます」の「いただく」の部分の国語学的分析

一般に、そして、伝統的には、日本人は食事の前に「いただきます」と手を合わせる民族である。

この「いただきます」は文法的には、次のように2つの品詞が組み合わさってできあがった表現である。

(1) 「いただきます」→

＜いただき＞＋＜ます＞

(2) a. 動詞：いただく

b 助動詞：ます

「いただきます」の「いただき」の部分（＝「いただく」が終止形）は、「食べる」という意味の動詞で、敬語形式としては謙譲語である。

謙譲語とは「行為や状態の主語（主体＝S）をその動作や状態の影響を受ける人（客体

=O) よりも下げる」、すなわち、「SがOを尊敬する」ことを表す敬語の形式である。

それでは「いただく」という行為の影響を受ける人とは誰であろうか。一般には食事を提供する側である。自分が客として、招かれた家の主人に料理を作ってもらった場合、「(自分が)いただく」という行為は、客体である「主人」を上げる表現であるから、「いただく」が謙譲語なのである。

謙譲語を用いるのに関わる人は、動作を行う主語とその動作の影響を受ける人の2者で、動作を行う主語が話者でない場合も含む。^{注6}

謙譲語の関係を次の様な図式で示すことにする。但し、 $A > B$ (または $B < A$) はAがBより上位であることを示す。

(3) 謙譲語：主語<客体

2-2 「いただきます」の「ます」の部分の分析

「ます」は敬語形式上「丁寧語」に属する。丁寧語を用いる表現は、話者と聞き手のみが関係し、文の主語は関係がない。そして、聞き手を敬って上げる表現である。つまり、聞き手が上位の場合に丁寧語が用いられるのである。以下の例文は男性が発するものとする。

- (4) a. 僕は先生からコメントをいただくよ。
b. 私は先生からコメントをいただきますよ。

(4a) では「ます」を用いていないので、(4a)の話者にとって聞き手は上位ではない。すなわち、話者の友達との会話などにおける文である。「いただく」という謙譲語が使われているのは、いただく行為の主語である話者に対し、そのコメントをいただくという行為の客体 (= 先生) が上位だからである。

(4b) では「ます」が用いられているので、話者に対し、聞き手が上位であることになる。聞き手に対して、話者が自分のことに触れる第1人称も「私」となっている点に注意すべきである。(4a) では友人同士の会話なので、男性の会話である限り、第1人称を「私」ということはない。

このように、第1人称と敬語表現は連動する

のである。

2-3 「いただきます」の客体と聞き手を考察する

2-1 と 2-2 で、「いただきます」の分析を行った。しかし、この言葉は1人でも用いる点に注目しよう。客体はその場になくてもOKであるから、「いただき」の部分は問題ない。

問題は「ます」の部分である。「ます」は話者と聞き手の2者が存在する中で用いられる。それなのに、この言葉は、話者1人でも使用されるのが普通だ。^{注7}

「いただく」の客体は料理を作って提供する側であるが、身内 (例えば話者の親) が作った料理を食べる際にも「いただきます」は発する。つまり、次の図式が成立する。

(5) 謙譲語：話者<身内

身内を上位とするのである。これは「身内を下げないといけない」という敬語ルールに反する。

ここで、「いただきます」の言語学的矛盾である「聞き手の不在」と「敬語ルールの違反」を一気に解決する方法がある。

客体を「食べ物」そのものとするのである。すると、「いただきます」を発する際の聞き手 (= 食べ物) は存在しているし、食べ物に対しては敬語ルール適用外となる。^{注8}

食べ物は物であるが、人格を与えて敬語ルールを適用することも可能だと考えることもできる。というのは、これまで述べてきたように、食べ物は神聖なものであるからだ。「いただく」という言葉を堂々と適用できるのである。「ます」の部分で聞き手である「食べ物」を上位とすることにも問題はない。

人間の敬語ルールについては言語学的に規定されるのに対し、人間と物の間の敬語ルールがあるとすれば、それは文化論的に規定されるのである。

箸を介在させて、聖なる食べ物と俗なる人間を隔てさせるのであるが、「いただきます」という言葉で食べ物に敬意を払うことにより、結界を破って (というよりも結界を安全に通過し

て) 聖なる食べ物をいただけるわけである。

それも聖なる箸を用いて、聖なる食べ物を、「いただきます」の発声により聖なる人間に変化した話者が食することが可能となると考えてよいだろう。

古来の日本人は、聖なる食べ物を安全に食するためのツールとして、空間的には箸、時間的には「いただきます」という言葉を用いてきたと考えることができる。

結界を表す標識(=本稿では「結界標識」と名付ける)に空間的な<物>と時間的な<言葉>があると本稿では考えているが、食事という行為において「箸」は空間的結界標識、「いただきます」は時間的結界標識に他ならない。

3. 言葉と結界の関係

3-1 結界を強める言葉

3-1-1 結界を強める言葉を分類する

2章で「いただきます」が聖なる食と俗なる人の間に時間的に介在する結界の存在を示す標識(=時間的結界標識)である旨を述べた。

そこで、論を一般化し、言葉と結界には、そもそもどんな関係があるかという問題を取り扱いたい。

「いただきます」は食と人との間の結界を示す結界標識なので、結界を強める言葉と言えよう。結界を強める言葉は、次のように、とりあえず大雑把ではあるが、3種類に分類できると、私は考えている。

- (6) a. 宗教的言葉…真言、祝詞など
- b. 敬語…尊敬語、謙譲語、丁寧語^{注9}
- c. 優しい言葉

そして、(6a)、(6b)、(6c)の順に結界を構成する強さ(=本稿では「結界構成力」と呼ぶ)が弱まる、すなわち、逆に言えば(6a)が最も結界構成力が高いと考えている。

3-1-2 真言と空間的結界

真言とは、人間界とは空間的に質の異なる「聖なる世界」の住人である如来や菩薩などとの交信に必要な言葉と言えるので、最も結界構成力が高いのは異論がないであろう。

そもそも真言は、密教において、仏陀や菩薩、明王、天からの直接のメッセージを意味しており、顕教における読経とは発想を異にする。

言い方を変えると、真言は神仏が発する聖なるエネルギーの音で、人間がこの音を発することで逆に神仏にメッセージが届くとされる。聖なる神仏と俗なる人間を直接結びつける「聖なる仕組み」(divine device)とでも言えるものである。つまり、結界を壊すことなく、神仏と交流できる手段が真言であると言える。

一方、経典は聖なる神仏と俗なる人間の間に介在し、神仏のメッセージが経典に翻訳され、そのメッセージが人間へと伝わるのは、経典を読むことによる。

- (7) a. 密教: 神仏 → → → 人間
(直接コミュニケーション)
- b. 顕教: 神仏 → 経典 → 人間
(間接コミュニケーション)

3-1-3 敬語と心理的結界

人間は一般に、他の人との間に、その人との親密度に応じ、心理的な距離が存在する。その距離を広義の結界(本講では「心理的結界」と呼ぶ)と解釈すると、言葉は結界を壊す可能性を秘めている。簡単に言うと、ある言葉で人が傷つくということがあれば、それは心理的結界が破壊されているからに他ならない。

敬語は、会話の相手を話し手より上位に置く、文字通り聞き手をリスペクトする言語的仕組みを含んでいる。^{注10}

それ故に、敬語は心理的結界を壊す可能性は低い。逆に言うと、敬語は結界構成力が比較的高いと考えてよい。

しかし、いくら敬語を使っても、メッセージのコンテンツが非難であれば、心理的結界は破壊される。たとえ建設的な批判であっても、心が揺らぐので、同結界は傷つくと思われる。

もちろん、メッセージ内容が同じであれば、敬語を用いるほうが丁寧で、相手をリスペクトしているので、相手の結界に対する悪影響は少

なくなる。

2章で考察した「いただきます」も、結界を強化する敬語の例に他ならない。

3-1-4 優しい言葉とは

コミュニケーションの相手に伝える言葉が、非難や批判よりは、優しい言葉のほうが心理的結界を守ることにつながる。

優しい言葉とは何かを考えさせる禅の発想があるので紹介しておくことにする。「喫茶去」という発想である。「喫茶去」とは「お茶をお召し上がりください」程の意味である。^{注11}

喫茶去の発想は、中国の唐代の著名な禅僧である趙州禅師の元に2人の修行僧が来たという話に基づく。

趙州は、まず1人の修行僧に「あなたはここに来たことがあるかな？」尋ねると、「いいえ、ありません」と答えた。そこで趙州は「喫茶去」と言った。もう一人の修行僧にも同様のことを尋ねると、「はい、来たことがあります」と答えた。すると趙州はまた「喫茶去」と言った。

寺務を扱いつつ、自らも修行僧である院主が、「初めての人にお茶を出すのはいいとして、以前来た人にも同様に茶を勧めるのはなぜですか」と聞いた。すると、趙州は「院主さん」と呼びかけたので、「はい」と答えた。趙州は「喫茶去」と言った。

趙州は院主の質問に直接答えていない。それどころかお茶を出す立場の院主にもお茶を勧めるのである。この話が意味するのは、禅の教義上、「老若男女・貴賤上下、さらには状況や立場の差に関係なくお茶がふるまう心」の大切さを示したものであるとされる。

私はコミュニケーションを言語学的に分析する専門家として、この話を次のように解釈したい。

趙州禅師は、真言などの宗教語を用いない条件下、最も優しい言葉を発した。この喫茶去は次の2点において注目すべきである。そして、この2点がこの言葉が最も優しいとした理由である。

(8) a. 間接的である。

b. 会話の相手を論じていない。

(8a) は院主の質問に直接答えていないということ。結果として院主は、趙州の教えを悟るのだが、自ら考えさせるということは、師の言葉が心理的結界を破るようなことにつながらない。

(8b) は (8a) の裏返しになる。直接論すと、たとえ立派な教えでも、その内容にやや動揺し、その後、悟りへとつながるものの、最初の段階で心理的結界を弱めることになる。

趙州は院主の心を傷つけることなく [= (8b) の状況]、真理に気づかせる [= (8a) の状況] という方法をとったのである。さすがとしか言えない。

3-2 結界を弱める言葉

3-1で述べてきたことの反対の要因を持つ言葉が、結界を弱める言葉となる。簡単に言えば、次のような言葉である。

(9) 罵詈雑言、非難、批判、説教、注意、説得……

(9) は、挙げた順番にトーンダウンしてゆくが、その逆の順に心理的結界を壊す可能性が増えていくものと思われる。

説得の類も、一般にうれしいものではないので、心理的結界を弱めることになる。「説得」して、それが成功すると「納得」という段階に到達するが、この納得は結界を再度強めるように働く。

3-3 言霊と結界

神道的発想の中に、「言霊」というものがある。日本語の音に意味があるという考え方で、この発想の延長線上に、プラスイメージの言葉はプラスの結果を生み、マイナスイメージの言葉はマイナスの結果を生むという考え方が存在する。

だから、極端な場合、「閉会」という言葉は「閉じる」を含むのでマイナスだから、「お開き」というプラスイメージの言葉に置き換えるという現象が、日本語表現に見られる。

神社でのお願いの言葉もプラスイメージで祈るのがよいとされる場合がある。

(10) a. 病気をしませんように。

b. 健康でありますように。

(10a) 文と (10b) 文はほぼ同じことを祈っているが、(10a) 文には「病気」というマイナスイメージの言葉が入っているので、(10b) の祈り方が推奨されるわけである。

言霊の影響を考えると、次のようなことが言えるであろう。

(11) a. プラスイメージの言葉は神仏と自分との間の結界を壊さない。

b. マイナスイメージの言葉は神仏と自分との間の結界を壊す。

結界が壊れると、メッセージがうまく伝わらないので、(10a) 文のような祈りは避けるべきだと言うことになるのである。

4. 文の構造に見る結果

4-1 言語的結界

3章では、心理的結界と言語について考察を試みたが、本章では、言語そのものの文法構造に着目したい。特に日本語の文法が、結界という概念と深くかかわっていることを示したい。

(12) a. 今日は雨だ+ね。

b. 試験は難しかった+の。

上記の例で、「ね」や「の」は主観的な感情を表している。それぞれ「確認」や「疑問」の意味を持つが、それ以上のニュアンスを伝える側面がある。「聖なる」(＝言語学的に言えば「客観的な」)命題に対し、「俗なる」(＝言語学的に言えば「モダリティ」を示す)終助詞が付加されているわけで、上記の「+」のところに結界が存在していると言える。

このように、客観性と主観性(＝モダリティ)の接するところを言語的結界と呼ぶことにする。

まとめると、日本語文は<客観+主観>の構成が基本となるので、言語的結界が可視化されている。^{注12}

4-2 同品詞が連続しない理由と言語的結界の関係

4-2-1 文における品詞の不連続

4-1 では、次のように規定した。

(13) a. 客観的な命題 → 聖

b. 主観的な終助詞 → 俗

一般に、同じ品詞は連続しない。このことは、概して、殆どの言語に当てはまる。

(14) a. *彼は車を売っている。

*He I sell cars.

b. 彼と私は車を売っている。

He and I sell cars.

(15) a. *彼は車家を売っている。

*He sells cars houses.

b. 彼は車と家を売っている。

He sells cars and houses.

(16) a. *彼は車を売っている買っている。

*He sells buys cars.

b. 彼は車を売り買いしている。

He sells and buys cars.

(14) は代名詞、(15) は名詞、(16) は動詞が連続すると非文になる例を示している。正しい文にするには、日本語では「と」を用いたり、「売り買い」など特別な形にする必要があり、英語では、and を用いる必要がある。

これは、同じ品詞が主観とは関係ない客観的事象を示しているので、単語同士が聖と俗に分けられないため、つまり結界を作れないため、連続しないのである。

(17) a. 終助詞以外 → 客観性 → 聖

b. 終助詞 → 主観性 → 俗

それでは、「と」や and を用いると、非文でなくなるのは、一般の品詞と「と」や and が客観性において微妙な差があるからと言える。

(18) a. 犬と猫が好きだ。

b. I like dogs and cats.

(18) で「と」や and の前後にどんな名詞を置くかによって、微妙に意味が異なる。例えば「犬と猫」(dogs and cats) という場合と「猫と犬」(cats and dogs) という場合ではニュアンスが異なる。前においた名詞のほうが微妙に重視されるのである。だから、この「と」や and

は主観的な意味を生み出す。決して100%客観的とは言えない。これは他の格助詞や副助詞にも言える。

従って、(17)を次のように規定し直すことができる。

(19) a. 助詞以外 → 客観性 → 聖

b. 助詞 → 主観性 → 俗

(19)により、助詞と他の品詞の間に結界ができるので、「と」やandを用いると非文でなくなるのである。

4-2-2 形容詞が連続する理由

日本語でも英語でも形容詞という品詞だけが、「と」やandなしに連続できることに注意すべきであろう。

(20) a. beautiful young woman

b. 美しい若い女性

(20)では、2つの形容詞が「と」やandを伴わず、連続している。これは客観性のレベル差から説明ができる。＜客観性1＞と＜客観性2＞を想定し、数値が高いほうが客観性が高いとすると、次のようなことが言える。

(21) 客観性と形容詞

客観性1	客観性2	名詞
beautiful 美しい	young 若い	woman 女性

客観性が低いほうが主観性が高いわけだから、beautifulや「美しい」は「俗」で、客観性が高いほうが主観性が低いので、youngや「若い」は「聖」と規定でき、聖俗の対比ができる。従って両者に結界が生まれ、つながりがよくなる。

尚、名詞は最も客観的であることは間違いないので＜客観性3＞と規定できる。すると、＜客観性2＞が俗となり、＜客観性3＞が聖となり、それゆえ聖俗対比が可能となり、結界が生まれ連続が自然となる。

4-2-3 日本語の終助詞が連続する理由

主観性を示す終助詞も形容詞と同様、連続して現れることがある。

(22) 試験は難しかったのよね。

(22)文において、「の」「よ」「ね」は、それぞれ疑問、強調、確認の意味を持つ助詞と言える。主観性のレベルを想定し、数値が高いほど主観性が高いとすると、次のような図式が想定できる。

(23) 主観性と助詞

主観性1	主観性2	主観性3
の	よ	ね

上記3助詞の中で、「の」が最も主観性が低い、すなわち最も客観性が高いのは、「なぜだろう」と主観的に不思議に思う場合だけでなく、単に純粹に、機械的に、無感情な質問でありうるからである。「強調」や「確認」に比べたら主観性は低いと思われる。^{注13}

4-2-4 日本語の助動詞連続の理由

日本語は、助動詞が連続するという特徴を持つ。^{注14}

(24) メアリーは先生にその部屋でフランス語を勉強させられたくなかった。

(24)文において、助動詞は(25)表のようにつながっている。上段が助動詞、下段がその意味を表している。

(25) 助動詞のつながり

させ	られ	たく	なかつ	た
使役	受身	希望	否定	過去

ところが、終止形にしてつなげてみると非文になる。

(26) *…勉強させるられるたいないた。

すなわち、助動詞がつながるのは、客観性（または主観性）に関し、各助動詞に差が出て、それゆえ結界が発生し、スムーズに流れるということではなく、そもそも1つの単語を作っているから、助動詞間にそもそも結界を作る必要がないから、存在ができていと考えられるのである。つまり、「りんご」やappleという単語において文字が連続しているのと実質的には同じことなのである。

4-3 敬語と言語的結界

3-1で敬語が心理的結界を強化する仮説を

述べたが、心理的結界に関わる敬語システムは、言語的結界とどう関わるのかを掘り下げた。(19)のような規定とは別に、次のような規定を想定できる。

(27) a. 敬語を用いる表現 → 聖

b. 敬語を用いない表現 → 俗

(27a)の「敬語を用いる表現」が聖なのは、この言葉を発することにより、聞き手の心理的結界が壊されることはないからだ。聞き手側は敬語を用いて話しかけられることに心地よさこそあれ、気分を害することはない。

4.1 および4.2で述べてきた言語的結界と(27)で挙げた敬語に関わる言語的結界とは質が異なる。というのは客観・主観の尺度で(27)を考察すると、一見以下の矛盾に陥るからだ。

(28) a. 敬語を用いる表現 →

主観性にかかわる^{注15} → 俗

b. 敬語を用いない表現 →

客観性にかかわる → 聖

そもそも主観性は、俗なる人間の気持ちを表すという意味で「俗」である。敬語は、俗なる人間の質を聖なるレベルに上げる言語的手法と考えることで、矛盾が氷解する。

(29) a. 人間 → 俗なる状況 →

敬語の使用 (= 主観性高) →

聖への転換

b. 人間 → 俗なる状況 →

敬語の不使用 (= 主観性低) →

俗の継続

5. 結 論

これまで、言語と文化と結界の関わりを述べてきたが、再確認と今後の研究の方向性を示すために、簡単にまとめておくことにする。

1章では、箸と結界の関わりを論じ、箸が聖なる料理と俗なる自分との間の空間的結界標識の役割をしていることを示した。

2章では、日本人が食事時に発する「いただきます」という言葉は、料理を食事の行為者である自分より上位に上げる役割をしており、その結果、この言葉が食事という聖なる時間を生

み出す時間的結界標識となっていることを示した。

食事という聖なる時間は、「ごちそうさま」という言葉で終了する。従って、「ごちそうさま」も時間的結界標識となる。従って「ごちそうさま」が発せられないと、食事の時間という聖なる結界形成が不完全となる。

3章では、もっと一般化して、言葉というのが結界とどう関わっているかを掘り下げた。真言や祝詞などの聖なる言葉や敬語、そして優しい言葉は、質的な差があるものの、結界を形成し、強固なものにするという意味で、使用が推奨される。

神仏に捧げる真言や祝詞などと敬語と優しい言葉においては、結界関係はそれぞれ次のようになっている。

(30) a. 真言・祝詞など →

人間：俗 / 神仏：聖

b. 敬語 →

(i) 人間：俗 / 神仏：聖

(ii) 話し手：俗 / 聞き手：聖

c. 優しい言葉 →

話し手：俗 / 聞き手：聖

(30b,c)にあるように、人間間のコミュニケーションにおいては、聞き手を上位とするので、宗教的には「聖」である。コミュニケーションが成功するには、敬語や優しい言葉が心理的結界を形成し、その結果、意志がうまく伝達するのである。

一方、それ以外の言葉、例えば罵詈雑言・非難・批判や冷たい言葉は、人間における心理的結界を壊す方向に動くので、メッセージがうまく伝わらず、避けるべき言葉となる。

4章では、日本語の言葉そのものの文法機構について、結界的発想のフレームワークから、原理的な説明を試みた。この場合は、次のような結界関係を想定した。

(31) a. 主観性：俗 / 客観性：聖

b. 助詞：俗 / 助詞以外の品詞：聖

(31a,b)から、助詞は主観性を表し、助詞以外は客観性を表す証拠を示し、文が文法的になるためには、言語的結界が成立していることが

求められることを提示した。

本論は、空間的に形成される「結界」が言葉を通して時間的な結界を形成すること、更に、その言葉自体に結界の概念を導入することで、文法機構の新たな説明が可能であることを示した。

時間的結界や心理的結界、そして言語的結界という新たな概念が、日本文化における種々の現象を包括的に説明できるかどうか、また、言語的結界による説明が日本語以外に可能であるかどうかなど、明確にしてゆかないといけないと思われることも多い。

更に、神社や寺、そして一般家屋に見られる空間的結界と言葉が生み出す時間的結界の関係や、人間間のコミュニケーションにおける心理的結界と文を形成する言語的結界の関係などを明確にすることが今後の研究課題である。

注

1. 密教においては、結界の種類も色々と出現する。
 - (i) a. 国土結界…広域の結界
 - b. 道場結界…道場に魔が入らぬよう特別の修法によってできる結界
 - c. 壇上結界…護摩修法によりできる須弥壇上の結界
 国土結界の例としては、比叡山や高野山がある。
2. 鳥居は神社への門として永続的に存在するが、しめ飾りは年始めに年神を各家庭に迎え入れるのに一時的に必要なものである。家の中を神聖にするという役目がある。
3. 日本神話では、天照（アマテラス）の孫である天孫ニニギが地上に降りるとき、天照が稲穂をニニギに与え、「これでみんなのお米を作りなさい」とお言葉をかけたと言われる。
4. 箸と神の関係は日本神話に現れる。高天原で乱暴を働いた罪で高天原を追放されたスサノオが、ある川のほとりを歩いていると、川上から箸が流れてくるのに気付く、上流へと向かうと、アシナヅチ・テナ

ヅチ夫婦とその娘がいた。夫婦は泣いているので、わけを聞くと、8番目の娘であるクシナダヒメを食べに、ヤマタノオロチがやってくるという。そこで、スサノオはこのヒメとの結婚を条件にヤマタノオロチを退治する。日本神話の重要なストーリー展開のきっかけとして「箸」が現れるのは、正に、箸が神聖なアイテムであることを物語っている。

5. 箸を使うが「箸中心文化」ではない韓国は、箸はあくまで、大きな皿に盛られた野菜などの取り箸なので、箸を食と自分の間に置くことはない。だから、箸は結界アイテムにならない。これは、文化的に食と口の間に結界を作る必要がないという文化的寛容性と合致している。
韓国は箸中心文化ではないと言えるのは、ご飯を入れた椀からスプーンでご飯をすくい上げて食べる方式だからである。
6. 次の表現を比べてみよう。
 - (i) 私は食事をいただきました。
 - (ii) 彼は食事をいただきました。
 - (iii) 彼女は食事を召し上がりました。
 (i) と (ii) において謙譲語「いただく」が使用されている。謙譲語が使用されるのは、謙譲語が表す動詞の行為の主語と、客体、すなわち、その行為の影響を受ける人（＝食事の提供者）の関係において、客体を上げる表現である。典型的には主語が話者（＝私）であることが多い。
しかし、(ii) 文の主語は「彼」である。この文が示していることは、彼と客体の関係に於いて、食事提供者が上位（目上や年配者など）であることである。つまり、(ii) 文では、「彼」を主人よりも下げているのであって、「彼」と「私」の関係も、また、当然であるが、「私」と「主人」の関係も示されない。
一方、(iii) 文では「召し上がる」という尊敬語を使っている。尊敬語は、その動詞の意味が表す行為者が、その言葉を使った文を語る話者との関係で、行為者が上位で

あることを示すものである。ここでは、「彼女」が食事を提供する側（＝主人）よりも上位であることを示しているわけではないことに注意すべきである。「主人」が「彼女」よりも上位であっても、「彼女」が「話者」よりも上位であったら、(iii) 文を用いるべきなのである。

ここで分かることは、第3者が話者よりも下位で、主人よりも上位であった場合、尊敬語が使えない上に、謙譲語も使えないので、例えば (ii) 文は「彼は食事をしました」（会話の聞き手が話者よりも上位の場合）、または、「彼は食事をした」（聞き手が話者よりも上位ではない場合）と言わざるを得ない。言い換えれば、話者を除いた二者の上下関係は尊敬語という言語形式で表すことはできないのである。

次のような図式が尊敬語の関係を表している。但し、 $A > B$ は A が B より上位であることを示す。

(iv) 尊敬語：主語 $>$ 話者

そして、「ます」を用いた丁寧語は、次の関係を表す。

(v) 丁寧語：話者 $<$ 聞き手

7. もちろん、最近では「いただきます」を発しない人も増えている。それでも頭の中で発することがある。その際、聞き手を意識するようなことはない。
8. 敬語ルールは人間にのみに適用されるルールで、人間と食べ物との関係については言語学的なルールは存在しない。だから適用外となる。
9. 敬語を5分類する考え方もある。

(i) 敬語の5分類とその例

尊敬語：おっしゃる

謙譲語：申し上げる

丁重語：おる（→信じております）

丁寧語：ます（→信じています）

美化語：お車、お花、お煙草 etc.

注：丁重語は丁寧語と連結して丁重を表す。

10. 敬語のうち、丁寧語は話し手と聞き手の間

で、聞き手を上位と見なす言葉である。その他の敬語として、行為の主語を話し手よりも上位と見なす尊敬語と、行為の主語の影響を受ける客体をその主語よりも上位と見なす謙譲語がある。尊敬語と謙譲語は話し手と聞き手の関係を問わない。だから、「聞き手をリスペクトする言語的仕組みを含む」と述べたわけである。

(i) 田中さんはそうおっしゃいました。

(i) 文において「おっしゃい」（＝「おっしゃる」が終止形）の部分は「言う」という行為の主語をリスペクトする尊敬語、「まし」（＝「ます」が終止形）の部分が聞き手をリスペクトする丁寧語である。だから、聞き手が友人など対等の関係の場合は、次のような表現が典型的であろう。

(ii) 田中さんはそうおっしゃったよ。

11. 「去」の部分は「去る」という意味ではなく、強調を表す接尾辞である。
12. 英語の場合は、助動詞が主観を表すが、surprisingly（驚いたことに）や carelessly（不注意なことに）などの文副詞も主観を表す。さらに、助動詞でも do の場合は、他の助動詞のない場合の一般動詞文の疑問文や否定文、または強調形を示すためだけに挿入されるので、英文中に主観・客観を分ける明確な図式が設定しにくい。その点で、英語は言語的結界が不可視であると言える。
13. 英語の文法機構を例にとれば、疑問の客観性が説明できる。つまり、疑問化の仕組みが英語で形式的であること自体が、疑問という事象の客観性を物語っているのである。英語では、主語と動詞の転倒、または、主語と助動詞（成分）の転倒により、疑問を表すことが出来るが、これは単純な文法操作である。一方、強調や確認は、色々な方法があり、語彙的にも示すことができ、操作が明確ではない。だから主観性が高いと考えてよい。
14. ちなみに英語では、助動詞の連続は見られ

ず、(22) 文の助動詞連続のうちでは、過去の助動詞が、英語の do 助動詞の過去形で表せるという部分に、英語の助動詞が関わるのである。

(i) *John will can speak Chinese. (ジョンは中国語が話せるであろう)

(ii) John will be able to speak Chinese.

英語では (i) のような助動詞連鎖は不可で、(ii) 文のようにしなければならない。なお、(22) 文は、英語にすれば、日本語の主語の部分を除いて、真逆になる点に注目すべきであろう。そして、日本語の助動詞の意味は、英語の様々な文法機構が負うことになる。以下の英文で、それぞれの数字の箇所に対応する日本語訳は、①た、②なかつ、③たく、④られ、⑤され、⑥勉強、⑦で、⑧その部屋、⑨に、⑩先生、となる。

(iii) Mary did not want to be made to

① ② ③ ④ ⑤

study in the room by her teacher.

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

15. 敬語を用いることが主観性に関わるのは、聞き手や敬うべき第三者のことを心理的に思い描くからである。人を敬うのは主観行為である。客観的に事実を敬語を用いず表現することに主観性は感じない。

参考文献

- 青木周平 (2005) 『古事記がわかる事典』(日本実業出版社)
- 井上順孝 (2006) 『図解雑学 神道』(ナツメ社)
- 原口庄輔ほか (1992) 『チョムスキー理論辞典』(研究社)
- 樋口清之 (1980) 『柔構造のにつぼん人』(朝日出版社)
- 平川彰 (1970) 『現代人のための仏教』(講談社)
- 平野仁啓 (1982) 『日本の神々 --- 古代人の精神世界』(講談社)
- 石井隆之 (1991) 『日本文化の真相と深層』(TAC 言語文化研究所)
- 石井隆之 (2009) 『「重なり志向」の日本人』『言

語文化学会論集』第 33 号

石井隆之 (2010) 「重なり志向と分かれ志向」『言語文化学会論集』第 34 号

石井隆之 (2010) 『日本の宗教の知識と英語を身につける』(ベレ出版)

石井隆之 (2012) 「日本神話と重なり志向」『言語文化学会論集』第 38 号

石井隆之 (2013a) 「神道と『重なり志向』」『言語文化学会論集』第 40 号

石井隆之 (2013b) 「スサノオと重なり志向」『言語文化学会論集』第 41 号

石井隆之 (2014) 「日本文化と『二的重なり志向』」『言語文化学会論集』第 42 号

石井隆之 (2015) 「more than と以上を考える」『言語文化学会論集』第 44 号

石井隆之 (2015) 「反復原理と追加原理 --- 森羅万象を説明する原理の再構築」『言語文化学会論集』第 45 号

石井隆之 (2016) 「日本文化と結界に関する一考察」『言語文化学会論集』第 46 号

石井隆之 (2017) 「時間的結界と言語的結界」『言語文化学会論集』第 48 号

磯部忠正 (1983) 『日本人の信仰心』(講談社)

板坂元 (1978) 『日本語の表情』(講談社)

鹿島昇 (1985) 『日本神道の謎』(光文社)

加藤秀俊 (1975) 『日本人の周辺』(講談社)

河合隼雄 (1982) 『中空構造日本の深層』(中央公論新社)

剣持武彦 (1978) 『「間」の日本文化』(講談社)

剣持武彦 (1984) 『「にじみ」の日本文化』(講談社)

本田総一郎 (1978) 『箸の本』(柴田書店)

牧田茂 (1972) 『神と祭りと日本人』(講談社)

松下井知夫他 (1985) 『コトバの原典』(東明社)

南博 (1983) 『日本的自我』(岩波書店)

森三樹三郎 (1971) 『「名」と「恥」の文化』(講談社)

立川武蔵 (1995) 『日本仏教の思想』(講談社)

吉野裕子 (1995) 『日本人の死生観』(人文書院)

補遺

「いただきます」に相当する英語は存在しな

い。これは西洋人にとっては、料理と人間の間に結界が存在しないからであるとも言える。

西洋料理は、日本の伝統料理と異なり、同時に出されない。時間の経過とともに出される。これは、食べる前（＝食べていないとき）と食べ始める瞬間以降（＝食べているとき）を明確に分けるという日本料理的状況はない。このことから、「出てきたら食べる」ということになるので、「いただきます」の言葉がないのであろう。

西洋文化圏では、料理は人間が作ったもの（＝アダムとイブが犯した原罪のため、楽園を追放されたから、人間は自ら食べ物を作ることになった）であるから、神聖さは感じない。

むしろ、人間に与えられた自然から人間が生み出したものだから、自然征服感を感じるための料理であるとも言える。だからこそ、肉料理

などは、肉を切りながら（＝自然を征服している感覚で）、肉を食するということになるのであろう。

大雑把に言って「日本料理は空間的」、「西洋料理は時間的」ということになる。空間的な日本料理だからこそ、「季節を感じさせる色合い」や「器の選定」、そして「盛り付け」にも気を使う。

空間重視だからこそ、結界の意識も生まれる。結界は聖なる空間と俗なる空間を分ける文化システムであるとするのが基本にあるからである。

日本に「いただきます」が存在し、西洋に存在しないのは、結界意識の有無にあるとも言えるのである。日本人の仕草には、「結界」に関して意識することはないにしても、様々な事象に結界意識的なものが見え隠れするのである。